

現役教諭「丸刈り強制やめた経緯参考にして」

生徒と一緒に校則変えた



当時の生徒たちの自画像。丸刈り(左)から自由化された頭髪に変わっていく  
＝加古川市内

スクープラボ

27年前の加古川市立志方中学校

髪形に髪の色、果ては下着の色まで指定。冬場でもタイトの着用は認めない。神戸新聞の双方向報道「スクープラボ」には、そんな「ブラック校則」を巡る疑問が相次ぎ寄せられている。8月31日付朝刊では、勇気を出して「改正」を願い出た女子高校生が学校側に一蹴された記事も掲載。すると、加古川市の現役教諭から一本の投稿が届いた。「生徒と信頼関係を築き、校則を変えました」。なぜ、可能だったのか、理由を尋ねようと取材に向かった。(鈴木久仁子)

時はさかのぼること27年前、1992年のことだ。後に米大リーグのヤンキースで活躍した松井秀喜さんが、甲子園で5打席連続敬退をされた年でもある。舞台は加古川市立志方中学校。まだ駆け出しだった男性教諭(56)は、同じ加古川市内で「男子の丸刈り強制をやめた中学校が出た」と聞いて衝撃を受けた。当時は丸刈りが当たり前だったからだ。

「確かに時代の流れには合わない」。そう思う一方で、「もし自由化したら、高校入試で子どもたちが不利にならないか」との不安が頭をもたげた。先輩や同僚教諭とも相談した結果、「自分たちで決めさせる」ことになった。

では、どのような進め方をするか。職員室は気持ち共有し、綿密な作戦を練った。まずは前哨戦として「ディベート(討論)の練習」をさせることに。テーマに選んだのは、当時、物議を醸した「松井選手への敬退は是非か」。互いに意見をぶつけ合い、結論を導く練習をした。

生徒会を中心に自由化か否か徹底討論

▶▶ 教師と信頼関係構築が鍵に

そして次に「丸刈りの校則を自由化するか否か。変えるなら、どのような形にするか」という本題を持ち込んだ。テーマを伝える際には「権利は

「自由に信頼関係ができ、中学生には、すごい力がある。もっと信頼しても大丈夫

「それはもう、腹をくりましたよ」と教諭。「中には茶髪やピアスのやんちゃな子もいましたから。どんな答えを出してくるか緊張した」と振り返る。

「かを主張するのははな／＼きちんと決めてほしい」と付け加えることも忘れなかつた。

「互いに信頼関係ができ、中学生には、すごい力がある。もっと信頼しても大丈夫

「感動しましたよ。自分たちできちんと線を引き、信頼してもらったのだから、きちんとしようという雰囲気もできた」

「極めて正常で、常識あるルール」だった。生徒会が中心になって話し合いを繰り返す。耳や目に深くかからぬように、きちんとした身だしなみを維持し、故意に染めるのはやめよう」と決めた。

「なんやや手応えも得ました」今でも鮮明に思い起せるほど、この出来事はその後の教師生活に大きな影響を与えたという。以来、上から押し付けるのではなく、なるべく生徒に決めさせることにこだわると。時には部活のゼニヤロも部員に決めさせた。

2019.10.13 神戸新聞分

丸刈りが議論されても30年、議論もなく、その姿勢もなく、ブラス、ブラスとは一昔も振り返ってそこに投げられた一石が見られる。